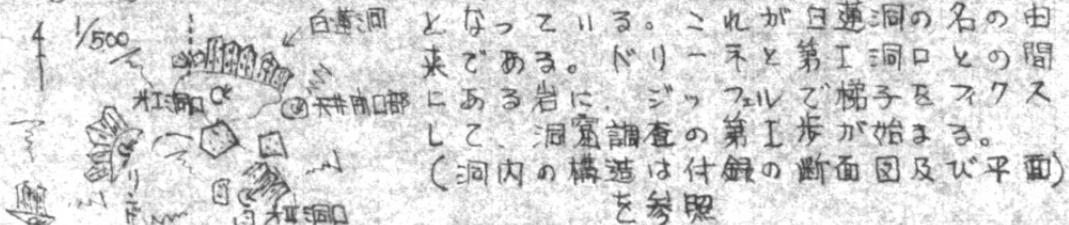


白蓮洞説明

千里洞の洞口より、東北東の方向にのびている谷を100m程分け入ると、そこは行き止りとなり、谷は終つている。ここに橋洞(耳の形をしてる)がある。この橋洞の東斜面を10m程登りきると、目の前にドリーネが見える、直径10m程の円形である。その底には、白蓮洞の第Ⅱ洞口がある。

ドリーネの北側に、第Ⅰ洞口がぽっかり空をにらんであり、ここは、北から流れ入る況に侵食されて白川花模様となつている。洞口は、北から流れ入る況に侵食されて白川花模様



(洞内の構造は付録の断面図及び平面)を参照

この洞窟にありても、ほとんど垂直あるいは、ハングざみな所で梯子を使用)と、だらだらとゆる下り坂になつてゐる所とがくりかえされてゐるわけであるが、特に肉体労働の点から、いわゆる「しんどい」ところは(i)洞口より、第Ⅰテラスをとおり、第Ⅰホールまで45mのはじめの行程で、オーバーハングしてゐる。(ii)いわゆる美女の滝、この「美女」の名稱は、滝にうたれビショビショになるとこゝからさき下駄洒落である。この滝には50mの梯子をかけたが、上の8mまでは梯子が完全に壁につけられており、それより下は壁より10cm程はなれて、梯子を昇り降りする分には、きわめて簡単なところであるが、どしゃぶりの雨のようになつてくる水はこれまでの洞窟の中でも、もつとも冷たく、約3℃である。特に上の8mは、梯子が壁に密着する下め、降つてくる水に加え、岩肌を流れる多量の滝水により、軍手をしてゐる手は無感覚となり、梯子をつかんで下ることすら困難であった。この下め50mをひとりきに昇ることが肝要である。

洞口より洞内を見あつすと、これはまるで井戸である。25m下に小さなテラスが認められる。これが、第Ⅰテラスである。そのテラスまでに15mのところがすこし狭くなつてゐることを除けば、奥に行く程広がつてゐる。

第Ⅰテラス(-25m地点)(1畳分の広さ) 南方向、仰角45°に第Ⅱ洞口、第Ⅰホールの天井に、小さな開口部が認められる。そこからは空や、雲や、緑の木々が見える。

第Ⅰホール(-45m~-70m) 正確にいって、これをホールと呼べきかどうか疑問である。北西にのびる二枚の断層面が、△型にびつて、天井と壁を構成してゐる。いわゆる岩のわれ目である。落石と流木のほとんどは、ここで静止する。小さな支洞があるが、これは明らかに落盤と落石によつてできた「すきま」である。この支洞内で生物採集をした。

次に24m梯子でありると、それから美女の滝までは、だらだら下っていかねばならない。途中2ヶ所梯子とかけた。上方の梯子は、大きな岩をのりこすためにフックスこれたものであるが、下方の梯子は、流木と落石でできて、くずれそうな滝を安全に通過するためである。この狭い過程(-80m² -100m)を幻聴ルートという。流水も多く、流木と落石の危険な滝(ほとんどが2m~3mの高さ)が4ヶ所ある。

美女の滝をおりたところに第Ⅱテラスがある。5m四方のテラスではあるが、どしゃぶりの雨にさらされて、それを避けるところが見えない。二のテラスの下に15mの梯子であります。そこから第Ⅱホールまでは、もはや広いところなど全くなく4ヶ所の梯子の使用が必要である。(そのうち1ヶ所は、苦労のすえ使用せずに通過した)特に狭いところは、1ヶ所だけである。この-200m~-300mを狂人ルートといふ。

この狂人ルートまでくろと流木の大きさにも限度がある。大きくとも直径15cm以下である。ホールは、11つがあり、大が流水、降水は、ほとんどない。静かである。

第Ⅱホール(-310mの地点)、いたるところ落盤である。入り口は落盤にもなると高さ5mにもなる。ここには泥茹があり、ラミエリのすばらしい化石もここにある。

第Ⅱホールより二ラマレの間まで35mの過程は、チムニークライミングで通過する。二ラマレの間は、ゆ3m、長さ8mぐらいである。小石が、床一面にちらばっている。進んでゆくと、目の前が二つに分れている。(アルバム写真を参照)二にしても流木がある。こんなところまで流木が来ているとは全く驚異である。二ラマレの間の4mの段玉から下へ降りてゆくと、すぐに第Ⅲホールである。

第Ⅲホール(-355m地点)は、流木、落石はなく、白く、それである。何か霧のようなものが、下にこめている。直径10cmである。それから先是、落石、落盤が多く、45°の伏角が続いているのが、さめめて、危険である。人員も限度であった。

日光ライトで下を照らして、みようとしたが、あの霧のようなもののがじきしてよく見えない。石を落してもみたが、すぐに落盤の間に入ってしまう。しかし思うに、第Ⅲホールは床面と壁とが完全に連続して一枚岩であるから、水は決して吸い込まれない。だとすれば二ラマレの間まで流木を運んできた。多量の水は、二の第Ⅳホールよりも、さらにさらに奥深くのみまれていてにちがいない。

また、11つの日か第Ⅲホール以下に挑戦しなければならない。この白蓮洞は、長さといふ、深さといふ千里洞につき、まだそれ以上の困難さを持つていて。

われわれは、もっと体力をつけておかなければならぬ。